

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23053

研究課題名（和文）清代における「薛家将」故事の発展と拡大に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Development and Expansion of the "Xuejiajiang" Narrative in the Qing Dynasty

研究代表者

柴崎 公美子（SHIBASAKI, KUMIKO）

早稲田大学・文学大学院・その他（招聘研究員）

研究者番号：70844140

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：中国社会において古くから伝承されてきた薛家将故事が清代に至りその登場人物や内容を大きく膨張、増幅させている現象について、従来の研究では伝統的作品の踏襲、焼き直し、集大成という見方に留まり、十分に研究されてこなかった。本研究は清代こそが薛家将故事が最も成長したステージであると位置付け、その膨張、増幅の実態を清代の創作現象の一側面として解明することを目指した。薛家将故事は他の家将故事と結びついて「説唐」シリーズ化を成立させたり、伝統的な故事を新しいスタイルで取り込んで情節を膨張させているという実態を明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中国大衆文化でよく知られる薛家将故事について、時系列の流れに従った縦に連なる発展を重要視する従来の研究視点から離れ、清代各メディアにおける故事内容の膨張、変容を共時的な文学現象としてとらえてその諸点に視座を据えた上で、従来の家将故事研究では研究対象として顧みられることのなかった清代の薛家将故事テキストの読解と分析に真正面から取り組み、薛家将故事がいかに膨張したか、いかに変容したかという点について考察を加え、その背景にある時代性や小説の生成方法、出版文化の有様を浮かび上がらせ、清代の物語創作の一側面を解明しようとした点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：The phenomenon of the Xuejiajiang narrative, which has been handed down from generation to generation in Chinese society, has not been adequately studied in the past, as it has been viewed as an imitation, rehash, or compilation of traditional works. This study positioned the Qing dynasty as the stage of the greatest growth of the Xuejiajiang narrative, and aimed to elucidate the reality of its expansion and amplification as an aspect of the creative phenomenon of the Qing dynasty. The Xuejiajiang narrative was linked to other Xuejiajiang narratives to form the "Shuo Tang" series and to expand the storyline by incorporating traditional narratives in a new style.

研究分野：中国俗文学

キーワード：薛家将 羅家将 清代 家将小説 宮廷演劇 説唐 出版文化 中国通俗文芸

1. 研究開始当初の背景

唐代の名将薛仁貴を始祖とする英雄一族の活躍を描いた「薛家将」故事は、戯曲や芸能といった俗文芸方面に広く分布し、また長い時間をかけて脈々と受け継がれてきた。そして、清乾隆期に至り、隋唐交代期の歴史故事を物語る小説として最も知られる長編白話章回小説『説唐全伝』が世に出ると、その続書として薛家将故事を主体とする小説『説唐演義後伝』や『説唐三伝』、『反唐演義全伝』が刊行され、「説唐」の名で知られるシリーズ小説を形成した。

薛家将故事の諸作品は中国俗文学研究の貴重な資料ということもあって、作品の歴史学的考証や、元雑劇や明伝奇といった戯曲作品についての個別研究、史書から清代の小説に至るまでの作品を通時的に見た演変研究が中心的な課題として実施され、家将故事の中でも比較的学術的な研究が積み重ねられてきた。一方で、「説唐」シリーズ小説をはじめとした清代にテキスト化された薛家将故事については、その隆盛こそ認知されるものの、研究上ではその数や規模、メディアの種類や概要に言及されるだけで、作品そのものについての具体的な論証は行われて来なかった。古典小説や演劇の研究分野では明代の作品が完成形と見なされ、清代の小説や演劇以降の作品は明代までの作品の内容を継承し踏襲し、また焼き直したり集大成したりしたものだという程度の認識しか与えられておらず、また文人や研究者の間では清代家将小説の文学的価値を低く見つめる評価が大部分を占めていたからである。

しかし、清代薛家将故事の内容は、明代までの作品からすると、情節や人物について大幅に膨張、増幅している。また、現代の中国において一般的に知られている薛家将故事は、その大部分が清代の作品群の中に見えるものなのである。中国社会が薛家将故事をいかに受容し、伝承し、発展させてきたかという点を考えるならば、最もよく知られ、現代に至ってもさまざまなメディアによる受容が確認できる内容を有する清代のテキストの研究はこれまで以上に大きな課題とされるべきである。

だが、清代の作品群を明代までの作品の「踏襲」や「集大成」とし、テキストの文学性をうんぬんする従来の研究視点では、清代薛家将故事膨張現象を理解することはできない。そこで申請者は、清代の薛家将故事作品に見える情節や人物の膨張や増幅をその「成長」とみなし、清代こそが薛家将故事が最も成長したステージであると位置付けることにした。申請者は、東北大学の磯部彰氏を代表者とする「清朝宮廷演劇文化の研究」に参加し、清朝宮廷演劇の中に伝奇とも小説とも異なった内容を持つ薛家将故事があることを知った。宮廷演劇の劇本は、政治的な意図をもって改編されており、明代のものがそのまま継承されているというわけではない。目的はともかくとして、清代宮廷演劇の薛家将戯曲は、新しく「創作」されたものだと考えるのである。そうした作品の存在に直面して初めて、申請者は、清代における薛家将故事の「創作」を故事の膨張や増幅に関わる大きく新しい共時的な文芸ムーブメントとしてとらえ、その実態や仕組みを具体的に明らかにしようと思い至った。

2. 研究の目的

薛家将故事の膨張や増幅を清代に行われた創作活動が生み出したものとし、そこに明代作品の継承や焼き直しという行為に留まらない大きく新しい波があったことを明らかにして、清代の創作現象を評価しなおすことが本研究の目的である。それは、清代小説の来源や前身がどういうものであるかということや、薛家将故事がどのような変遷を経て清代に至り小説として集大成されたかという時系列の流れに従った縦に連なる発展を重要視する従来の研究視点から離れることを意味する。本研究では、明代作品から清代作品に至る内容の発展を通時的に見るだけでなく、清代各メディアにおける故事内容の膨張、変容を共時的な文学現象としてとらえ、その諸点に視座を据えた上で、従来の家将故事研究では研究対象として顧みられることのなかった清代の薛家将故事テキストの読解と分析に真正面から取り組み、薛家将故事がいかに膨張したか、いかに変容したかという点について考察を加え、その背景にある時代性や小説の生成方法、出版文化の有様を浮かび上がらせ、清代の物語創作の一側面を解明することを目指す。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では清代薛家将故事を研究するにおいて次の三つの視点を念頭に置くこととした。

(1) 家将故事でよく見られ、「同工異曲」として捉えられがちな画一的な物語パターンをジャンルを定義づける不変の枠組みとして捉える。

(2) 家将故事の中に、本来の故事とは全く由来の異なる故事が導入されることによる情節の膨張や変容に着目する。

(3) 従来の研究で行われていた同ジャンルあるいは類似ジャンルの通時的な対照研究ではなく、同時代の作品をジャンルを区別することなく横断的に比較対照する。

そして、これら三つの視点を元に考察する対象を以下の通りに定めた。

(1) 清代薛家将小説のうち、「説唐」シリーズの『説唐後伝』ならびに『説唐三伝』

(2) 清朝宮廷演劇

(3) 地方芸能

(4) 薛家将以外の家将故事

清朝宮廷演劇は、明代の継承あるいは焼き直しと捉えられていたもののひとつであり、従来の研究ではその「創作」には注目されてこなかった。地方芸能は、発生時期等の特定が困難なため、通時的変遷を検討する研究では対象として顧みられることがなかった。家将故事は「薛家将」と「楊家将」を除いて明代作品を有さないの、研究はほぼ棚上げ状態だった。

具体的な研究方法としては、乾隆期に刊行されたと見られ、明代までの作品と共通する内容を有する小説『説唐後伝』ならびに『説唐三伝』を清代における情節膨張、増幅のメルクマールとし、明代までの作品の内容と小説の内容との差異を明らかにして、清代に行われた「創作」部分の基準とする。その上で、小説の「創作」部分と上に挙げた三つの同時代の異なる文芸ジャンルとの比較に進む。そのうち、(2) 清朝宮廷演劇においては乾隆・嘉慶期までは既存の戯曲を利用しつつも政治的な意図をはらむ改編を行っていたことが明らかになっている。清朝は特に演劇を統治支配の手段として用いる傾向が強かった王朝だと言われている。宮廷演劇における「薛家将」故事の改編のされ方も、その傾向をはっきりと示している。そういった意味においては、宮廷演劇における薛家将故事には、高い恣意性を有する人為的な操作が強く働いていると考えられる。政治的な営為としての改編行為が「薛家将」故事の清代における特徴的な創作行為のひとつとしてとらえられよう。

一方、(3) 地方芸能は中国各地で独自に形成発展し、強い地域性を帯びていて、外部から流入してきた物語に対しても地域性を持たせた改変・増幅が行われることがしばしばある。こうした地方芸能における薛家将故事については、千田大介氏が清代皮影戯テキストを取り上げて論考を発表している。その論考では、皮影戯で演じられる薛家将故事の一部が北京を中心とした中国北方において独自の発展を遂げたものであることが明らかにされている。それら独自の発展を遂げた薛家将故事は、清後期に勃興した新しい芸能ジャンルに多く受容されて現在にまで至る。こうした地方芸能における現象と宮廷演劇における現象とを比較すると、清代前半の宮廷演劇から清代後半の地方芸能に至るまで、「薛家将」故事に手を加える波が広く長く伝わっていることがわかる。その背景にあるダイナミズムは何かということが大きな課題になるだろう。

(4) の薛家将以外の家将故事には、例えば太宗を支え唐建国に力を発揮した英雄の一人として有名な羅成を祖とする「羅家将」がある。羅家将故事も清代小説や演劇として作品が作られており、薛家将故事の膨張、増幅と比較検証が可能である。その比較をつうじて、清代における故事の膨張、増幅が薛家将にだけもたらされたのか、それとも他の家将故事にも見出せるのかということが明らかにできよう。

三つの視点によって四種のメディアを検討する方法としては、物語的構造的分析に真正面から取り組むことを第一とした。

4. 研究成果

清代における薛家将故事の膨張や増幅を文芸現象の一つとして捉え、その実態を明らかにしようとする本研究の成果について、以下の通り述べる。

2019年度から2020年度にかけては、『説唐後伝』冒頭十五回あまりを占め、単行本化したものが「羅通掃北」という通称でも知られる羅通の北伐故事を描いた小説について研究した。以後本文では「掃北」と略称する。「掃北」については本研究の採択前から家将小説研究の一環として考察を実施しており、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第65輯上にて論文『羅通掃北』に見る英雄物語の「創作」を発表していた。そうした研究の前提もあり、2019年12月21日に早稲田大学で行われた台湾大学中文系とのワークショップ「二十一世紀中国研究的新面向—文学、文化、語言」において、羅通小説の悲劇的な色彩について他の英雄たちの悲劇的描写と合わせて考察した「从“英雄悲劇”視角看《羅通掃北》創造的起點」と題する発表を行った。この時の発表を元に、「掃北」を「報復」の概念にフォーカスして改めて読み解き、「報復」が誰によるもので、何に発し、どのような結果をもたらしたかを中心に分析した。その結果、「掃北」がその報復主題によって興唐故事をモチーフとする小説『説唐全伝』と薛家将故事をモチーフとする小説『説唐後伝』および『説唐三伝』とを緊密に結びつける機能を果たしていることが判明した。興唐小説も薛家将小説も、本来は個別に成立し発展したものの同士であるが、「掃北」は両小説の時間的差異の隙間に入り込み、『説唐後伝』と『説唐三伝』を『説唐全伝』の「続書」とすることに成功しているのである。例えば、羅通による父羅成のための報復は、『説唐全伝』と『説唐後伝』とを結びつけ、羅通が弟を殺害した屠炉公主を死に追いやった行為は、『説唐三伝』の中で羅通の命が失われる結末を招いた。それだけでなく、本来は薛家将の敵であった蘇宝同が、羅通の報復を経て羅家の敵に変更させられるということまで起こっていた。こうした、「報復」を推進力として独立した複数の故事同士を結びつける創作行為が見出されたことが、本研究の大

きな成果の一つである。この研究をまとめた論文「『説唐』小説における物語の連続と増殖 羅家の「報復」をめぐる」を、2020年12月発行『中国文学研究』第46期（早稲田大学中国文学会）に発表した。

2021年度から2022年度にかけては、薛家将故事および羅家将故事に関する戯曲や民間芸能の状況を整理し、小説と地方戯曲における武将夫婦の関わりを描く物語に着目した。いわゆる「楊家将演義」のような、明代までに成立した家将小説においては、宗族に新しい戦力をもたらす、守護女神のような存在となる妻たちが描かれるのに対し、薛家将小説と羅家将小説には、夫あるいは情人である武将との関係性に困難や障害が生じる妻が見える。また、中国北方を中心に流布した地方劇の中に、有益な妻を夫が強く拒絶するという内容のものがああり、これは瑕疵のある妻を夫が離縁するという伝統的な「休妻」故事とは全く異なったものである。こうした新しい「休妻」の物語が薛家将羅家将両故事において共時的に見られることを指摘し、その中でも、夫である薛丁山から3度も離婚されるエピソード「三休樊梨花」で有名な樊梨花にフォーカスし、民間芸能、清朝宮廷演劇、薛家将小説における彼女の描かれ方を、とりわけ夫・薛丁山とその周囲の人間からどのように扱われているかという点について分類整理し、検討した。結果として、薛家将故事や羅家将故事については、「三休樊梨花」が新しい「休妻」のスタイルによって家将故事の旧来の枠組みを排除し、物語を膨張、増幅させる役割を果たしていることが明らかとなった。以上の考察をまとめた論文を、2022年10月発行の『WASEDA RILAS JOURNAL』第10号（早稲田大学総合人文科学研究センター）に発表した。

2023年度は、従来の薛家将故事研究と本研究との本質的な違いを再確認するために、本研究で設定した三つの視点から故事演変史を再構成し、清代作品につながる新たな知見を見出すことを目指した。再検討した内容は（1）平話『薛仁貴征遼事略』の構造の普遍性、（2）説唱詞話『薛仁貴跨海征遼故事』が出版された時点でのテキストの不完全性、（3）明伝奇『金貂記』における薛家将故事と尉遲敬徳故事の結合という3点である。これらの再検討を経て、明代までの薛家将故事作品演変の中に、英雄物語を大きな枠組みとしてさまざまな物語を取り込み、情節を膨張させる要素があったことを確認することができた。

本研究を通じて、清代薛家将故事の膨張と増幅の実態の一端を明らかにし得たと考えている。まず、「説唐」小説シリーズの形成において、羅家将故事が興唐故事と薛家将故事とを結びつける機能を果たし、その手段として報復主題が用いられたことが故事の膨張につながっていることを看取できた。このことは、清代特有の出版現象である「続書」創作の一側面であると言える。また、清代薛家将故事および羅家将故事には有益な妻を夫が拒絶するという新しいスタイルの休妻故事が組み込まれており、とりわけ小説においては旧来の家将故事の枠組みを突破してさらに物語内容を膨張させているということがわかった。

課題が採択され本研究が開始されたあと、COVID-19の流行によって国内外の移動が制限されるなど、研究の推進に困難が生じた時期があった。中国への渡航は現在に至っても難しい状態であり、実施できなかった研究もある。今後の展望としては、こうした積み残しの研究も併せて清代家将故事膨張増幅の実態解明にさらに努めたい。特に、家将小説のシリーズ化と清代の出版現象との関連性はより具体的に論証するべき課題であると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 柴崎公美子	4. 巻 10
2. 論文標題 「説唐」における休妻故事について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌 = WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 500 - 489
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柴崎公美子	4. 巻 第四十六期
2. 論文標題 「説唐」小説における物語の連続と増殖 羅家の「報復」をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 62-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柴崎公美子
2. 発表標題 「説唐」における休妻故事について
3. 学会等名 早稲田大学中国文学会第四十七回春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴崎公美子
2. 発表標題 从“英雄悲劇”視角看《羅通掃北》創造的起點
3. 学会等名 「二十一世紀中国研究的新面向 文学、文化、語言」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------